

「大判事」覺書

鳴澤孝輔



文樂座の四月

狂言「妹脊山婦女訓」山の段の大判事を榮三が遣つた。しかし

らは「鬼」薄

玉子蓋り、あたまはごま油附二つ折である。

(猪藤清二郎氏の文樂人形圖解に據る)

▽：「大判事様御入り」「後室様御出」と呼ぶ聲に久我之助と雛鳥とが互ひに心を残して夫々の庵に姿を消す「花を歩めど武士の心験粗刀し、削るが如き物思ひ、思ひ遙瀬の中を裂く」の「川邊傳ひに」で上手の横幕をひかせて大判事、右の手を左袖に、左の手を右袖に入れて腕を組み面を伏せて現はれ「大判事清澄」で上手寄り正面向きにてトン～と束に立つて極り腕を解く。下手妹山の方に同じく定高が現はれて、大判事様お役目御苦勞に存じますと會釋するので「清澄も一揖し」

で定高の方に首をひねつてから妹山の方に向ひ合せとなり「早かりし定高殿」一寸上手を見返り乍ら「御前を下るも一時、参る所も一つなれども」右手奥の方を見て「この脊山は身が領分、妹山は其許の御支配」と首を下げる「川向ひの喧嘩とやら」と反り身になり「睨合ふて日を送る此年月」首を正面にまはし

「心解けるか解けぬかな」反り身「今日の役目の落居次第」體に力を入れて首を振り「二つの勤め」體を反らせ「狼狽へた捌きめさるゝな」と右手を前に突出し首を正面へひねつてから左の膝頭を高々と上げて下し、伸るやうにトンと極り「毗くしやつく茨道」で右足をトンと正面へ踏み出すと共に同じく正面に向けた顎の眉を一杯に引上げて憎々しい表情を充分に見せておいて右足を引き寄せてトンと極る。

▽：定高が入鹿様の御説意を子供が承知せぬ時はと聞くので、大判事は定高の方に首を

ひねつて「ハテ知れたこと」改めてその方に向き直り「御前で承つた通り首打放す分の事」と力む「不所存の件はあつて益なく、なり事缺けず」首を振り「身の内の腐は」反り身「殺いで捨つるが跡の養生」と前にのり出し「畢竟親の子のと名を付けるは人間の私」首を正面にまはし「天」右肩を落して左手の上を見上げ「地から見る時は」トン～と正面に束に立つて下を見下し「同じ世界に涌いた蟲、別に不便とは存じ申さぬ」と妹山の方に向き首を正面にひねつて眉を上げて、それから首を垂れる。

▽：定高が忝い入鹿様のお聲のかゝつた身の幸ひ、たとへどう申さうとも母が勧めて入内させますと云ふので、大判事は「ウン」と後に引いた體を前にのり出して「シテ又得心せぬ時は」と首を振る。定高は枝ぶり悪い櫻木は切つて接木を致さねば、太宰の家が立ちませぬと答へる。「ラツ、ラツ……さうなくては叶ふまい」右手を前に突出して左の肩を引いて體に力を入れて振り「此方の件とても得心すれば身の出世、榮華を呪かす」で床は待合せとなり上手の櫻の枝を折つて正面となり「此の」とトンと右足を踏み出すと共に右

の櫻の枝を突出し「一枝」と讀けて左足をトンと引き寄せる「川へ流すが知らせの返答、盛りながらに流るゝは吉左右、花を散らして枝ばかり流るゝは櫻の枝を逆に持つてその切口に目を移し「伴が絶命と思はれよ」と櫻の枝を元の通り持ち直して前に枉げたまゝ體をのり出す。定高も櫻の枝を折つて、娘の命生花を散らさぬ様に致しませうと云ふので「ヲ、サ今一時が互の瀕越し」と體を起して搖り動かし「此の國境は」櫻の枝を右脇に引きつけ「生」首を正面へ刻む様にまはして眉を引上げ「死の境」と反り身となつて體を振り、「返答の善惡に依つて遺恨に遺恨を重るか」となる。定高「サアこれ迄の意趣を流して、中吉野川と落合ふか」大判事「先づそれ迄は双方の領分」と反り身となる。お捌きを持つてをりますと定高が頭を下げる。大判事も會釋して「詞喰つ」反り身となり「親と親」左足をトンと正面に踏み出すと同時に首を正面にまはし「山と」で右足をトンと引いて體每正面となり「變らぬ紀の路」でトン／＼と左、右の膝頭を上下させて極り「恩愛の胸は震に埋もれし魔の」で定高の方へ首をひねつてから、トンと上手の方へ右足を踏み出し

顔を正面にまはしてから、トンと裏上手向きとなり、向ふへ廻つて屋體へ入つてそのまま障子を開める。

▽妹山の方では定高が雛鳥に久我之助の命を助ける爲め入内して貞女を立てよと説き障子をとざす「重き脊山の」で脊山の方障子を取拂ふ。下手寄りに大判事正面を向いて坐り左の手を右袖に、右手を左袖に入れて腕を組んで面を伏せてて、上手の久我之助が切腹御赦免下さる事、大慶至極と手をつく「默然たる大判事や、打済む」で面を少し持ち上げて震はせるが再び深々と垂れるけれども（カット寫眞参考）「目を開き」で、首を軽く振つて面を上げ、両手を解いて膝において久我之助の方に向き「今朝入鹿大臣……先帝御寵愛の采女」首を正面にまはし「……其方が伴久我之助、人知らぬ方へ落しやりしに極れば何んとして「詞喰つ」反り身となり「親と親」正面に向ふを見て「必定」と反り身「汝等が方に廻ひあるべしとの難題」と久我之助の方に體をのり出し「……猿澤の池に入水の體にもてなし」右手を前に出して開いて眺め「密に落し參らせしは」再び體をのり出して「なつか／＼久我之助が智闇でない」首を振り「鎌足公の指圖を受けての計らひ」右手を開いて

上に翳して頭を下げ「……知つたは身も今日が始め……大審を渡さぬ心の金打」右手を柱に寄せて「若輩者には」久我之助を見やり「神妙の次第」と首を正面にまはして體を搖り動かし「ハハア」と體をのり出し「出來かしたり」體を起して首を正面へまはし「と思ふに付け」と首を垂れて「邪智深き入鹿、久我之助が降参せば命を助けん連れ來れと」右手を開いて上に翳して、それを前に下し「情の詞に釣り寄せて拷問にかけん謀」右手を握つて前に突出し「責殺さるゝ苦みより」右手を胸に當て「切腹さすれば采女の詮議の根を斷つ大功」右手を斬るやうに上から下し「天下の主の御爲には」右手を開いて頂き「何何んの一人など」左手を開いて久我之助を指差し「葬に生える草一本」と正面となつて縁ににじり出で右手で庭を差し「引くよりも瓊網な事」と右手を右から前に伸して引抜く仕方をして久我之助を見返る。そして「涙一滴こぼさぬ武士の表」右手をまげて胸に寄せて、面を伏せ「子の可愛うない者が凡そ生ある者にあらうか」左手を開いて久我之助を指差して、右手は膝に突張つて「餘り健氣な子に恥じて」右手を胸に當て「親が介錯してくれる

「と左手に太刀を取つて前に横たへ「侍の綺羅を飾り、嚴しく横たへし大小」右手を開いてその東頭を幾度も指差し「你が首を切る刀とは「東頭を握つて見下し」五十年來知らざりし」とその太刀を前に投げ出して、首を深く垂れる。すると久我之助が、命二つあるならば君には死して忠義を立て、父には生きて養育の御恩を送り申さんに今生の殘念是一つと悔むのでギックリと體を起し、左手で久我之助の右手をとり合ひ、右から、左から顔を見合せるのが「顔を見上げ見下して」で、體を震はせてウレヒを表はし「わづと平伏す親子の誠」でトン～と正面となり両手を膝に置いて泣き上げ、やがて面を伏せる。障子を閉す。

マ・妹山では雛鳥が女難の首を落す件があつて、定高の詞「心ばかりは久我之助の宿の妻と思ふて死にや」の邊りで寄山の障子を取拂ふ。大判事以前の居所で經機を前に經文を讀んでゐて、久我之助は上手に白裝束にて左手に三方を持つて後へ廻し右手の腹切刀を突き立てる。大判事ギックリとなり、右手に讀みかけの經文をグツと握り、左手を伸して久我之助の手元を押へて「ヤレ暫く引廻すな覺

悟の切腹せく事はない、コリヤ冥土の血脈讀みさしの無量品、親が讀誦する間」一寸腰を浮かして妹山の方に首をひねり「一生の名残女の面、一目見て」首を正面へまはして體を震はせ「何故死なぬ」とウレヒとなる。久我之助が私相果てしと聞かば、雛鳥も共に生害と申すべし。切腹の儀はお隣しなされ降参承知致せし體に後室へお知らせならばと云ふ間に右手に握つた經文を机において下手へ押しやり両手を膝において聞き「これぞ色に迷はぬ潔白」でギックリとなり、體を久我之助の方にのり出して「ヲ、出來した、能く氣が付いた」と體を起して搖り動かし「年來立てぬく武士の意地」妹山の方を一寸見返つて「命を捨つるは天下の爲」正面向ふを見「助くるは又家の爲」と右手で妹山の方を指差して顔は久我之助を見て云ひ「氣づかひせずと最後を清う花は三吉野」右手に以前の櫻の枝を持つて眺め「侍の手本になれ」と右足を右斜にトンと踏出し、櫻の枝を久我之助の前に輪を描くやうに動かして見せ「潔くいへど」で眉を引上げてウレヒ「心の亂れ唉き」で體を震はせて、そのまゝ面を伏せ「あたら櫻の若者をちらす惜しさと不便さと小枝に注ぐ血の涙」

で起上つて、久我之助の姿を見下したまゝトシ～～と下手へよろけて柱に脊をもたせ充分のウレヒを見せてから「落ちて波間に流れ行く」で、目を徐ろに川の面に移すと共に右手に持つた櫻の枝を力なく水面に投げ捨て柱に脊を滑らせて腰を落し、首を深く垂れると云ふので、大判事は静かに川の面を見る。そして「御苦勞ながら御介錯」で後向けとなつて肩衣を脱ぐ。雛鳥も母様切つていのと促す「思ひは同じ大判事」で太刀を左手にとつて久我之助に打向ひ「子よりも親の四苦八苦……日もちりん」で右足をトンと右斜に踏み出し體を搖り動かして充分のウレヒを見せる。定高は雛鳥の首を斬り落す「わづと泣く聲答める術」で大判事は妹山の様子に耳を傾けギックリとなり「肝に徹して大判事」でハツと立上り、左手に持つた太刀の東頭に右手をかけるが、ヨロ～となつてその太刀を落し、そのまゝ下手の障子に脊を當てると障子が倒れるのが「刀からりと落ちたる障子」で妹山の方に振り返りトント右足を踏み出して

向ふを眺め「ヤア雑鳥が首討つたか」となり定高の「久我殿は腹切つてか」にかぶせて「ハアしなしたり」トン／＼右手を出し左手を出し後は両手を前に泳がせると共に足踏みをするが、一寸両手を柱にかけて堪えて「……悔むも泣くも一時に呆れて調もなかりしが」一杯にトン／＼と足拍子を入れて下に伏し、又ヨロ／＼と立上つて正面にまはりそのまま両手を膝へ置いて首を垂れる。

▽定高が「入鹿大臣へ差し上ぐる雑鳥が首御檢使取下され」と呼ばるので、大判事肩衣を着けて正面となり「……歎きの姿改めて、衣紋縫ひ」の文句通り襟を正し秋を拂つて立上りカチャ／＼と庭下駄を穿いて船底に下り「しづ／＼とおり立つ」一杯に勾欄のところに正面となり、定高も雑鳥の首を抱いて庭に下りる間に川邊に進んで、斜下手向きで腰を下し、両手を膝におく。（これから大判事・定高の船底での動きに庭下駄の音を聞かす）せめて久我之助殿の息ある中に此首を其方へお渡し申すが、娘を嫁入りさせ心と定高の詞を受けて「實に尤も」と體を起し定高の方に向き直り「嫁は大和婿は紀伊國」屋體の内に俯伏した久我之助を指差して妹音の

山の中に落つる吉野の川の水盃」右手奥の川を見櫻のはやしの大島臺」左手の上を見上げた目を右手の上に移して行き「日出たう祝言さしませうわい」と首を垂れる。定高が是迄の心も解けてと尋ねるので「ハテ互に姫同志」と右手を前から下手の方へ押しやるやうに伸して首を左へ捻る。

▽雑の道具流しとなる、後向けとなつて肩衣を脱いで、竹のかきよせを持つて正面となり「未來へ送る嫁入道具、行器、長持、大張子、小袖草笛の幾種も命ながら居るならば……」の節の間、簾筒、揮み箱、長持、櫻に橋の順で流されるのをかきよせで岸へかきよせては水を切つて久我之助の前の縁側におく「紀念も仇の爪琴に首取乗する弘誓の船」で今度は爪琴に雑鳥の首を乗せて両端にばんぼりを置いたるを流さうとする様子を見て、縁に置いた太刀から小束を抜きとり下げ緒を結んで元の位置に戻り、流れ寄る爪琴の距離を測つて投げつけ、両手で手繩り寄せるのが

「あなたの岸から彼の岸に」で、両手でとり上げて久我之助の前に置き、縁側の前の手水鉢から柄杓を持て川岸に進み、塵を流して右手を出して止め「武士の覺悟は常ながら、之助を見返つてウレヒで首を垂れ「口に祝言の唱名」でカチャ／＼と庭下駄の音をさせ、力なく立上り「千秋」かチヤ「萬歳」カチヤと上手へ進むと體が震へて柄杓の水が漏れるのをそのまま縁側へ行つて先づ久我之助に飲ませ、後雑鳥の前に置く。後へ退つて久我之助と雑鳥の首とを見比べて「生きて居る中此様に婿よ嫁と言ふならば……」となり「……其上重なる入鹿の縫ひ」と腰を浮かして上手を見「中直るにも直られぬ義理になつたが二人が不運」と首を垂れ「……とても死なねばならぬ子供、一時に殺したは」右手を前に出し「未來で早う添はしてやりたさ」と首を垂れる「吾合せねども後室には」と妹山の方に向き直り「是迄不和な大判事、姫と思召せばこそ、併に立てゝ」首を捻つて久我之助を見返り「一人の娘、ヲ、よくこそ手にかけられし」右手を頂くやうに前に伸して首を下げ「こられこれ／＼と両手をとり合ひカチャ／＼と三つ膝を進めてから左膝を一つ戻して「過分に存する定高殿」となる。定高が手しほにかけて育てた子を、又手にかけて切る心と悔むので「サ、推量致してくるはサ」

まさかの時は反亂し、介錯仕後れ」屋體の方を見返りて「面目ない」と右手を前に出して首を正面へまはし、體を上手斜にそむけて、首を垂れる。定高の婚殿の無紋の上下の調を受けて「首ばかりの嫁御寮に對面せうとはしらなんだ」と腰を浮かして縁側の雛鳥の首を見返つて首を下げる。妹山の方に向き直つて「……世の中の子といふ文字に死の聲の有るも定なる宿業」と首を垂れ、定高と一緒に立つて双方から見合ひ「隔つる心親々の積る思ひの山々は」で定高と共に両手を泳がせ乍らカチヤ〜と後へよろけ「とけて流れて」一杯に両手を前に出した形で踏止り「吉野川いとゞ漲るばかりなり」両手を上に振るやうにして上手斜向きに坐り両手を膝において眉を一杯に上げて堪え、首を垂れる。

祝 百 號 發 刊

寫 眞
編 目 銅 版
修 亞 鉛 凸 版
出 張 摄 影 整
其 他 諸 版

植野寫眞製版所

大阪市西區江戸堀下通四丁目四十番地

(幼稚園前)

電話土佐堀 六三二二番
振替 座穴阪九一二四五番

「とかや」右手をひらけて出し「忠義に死する汝が魂魄……朝敵退治の勝軍を」首を正面にまはし「草葉の蔭より見物せよ」と左手を開いて上に翳し、それから右手を久我之助の

脊におき、「今雛鳥と改めて親がゆるして盡未來、五百生まで變らぬ夫婦」と左手に雛鳥の首を取つて久我之助の頬に近づけ「忠臣貞女の操を立て死したるものと高聲に」と久我之助の耳元に口を寄せて聞かせ「閻魔の廳を名乗つて通れ」右手を後から前の方に廻して出し「南無成佛得脱」と大きく合掌する。と久我之助も同じく合掌しやうとして出来ないのを見て右手を肩に左手で助けて合掌させてやる。

▽「首は脊山に檢使の役目」で左手に太刀をとつて立てかけ「……大和路や」で右手に抜き立上つて久我之助の前に突出し「……首を取つて久我之助の頬に近づけ「忠臣貞女の操を立て死したるものと高聲に」と久我之助の耳元に口を寄せて聞かせ「閻魔の廳を名乗つて通れ」右手を後から前の方に廻して出し「南無成佛得脱」と大きく合掌する。と久我之助も同じく合掌しやうとして出来ないのを見て右手を肩に左手で助けて合掌させてやる。左足を一踏み出してハツと氣合を入れて斬り下し、両手を上に打振り乍らどうとなり「花を見捨てゝ」で氣をとりなほし左手に久我之助の首を上げて持ち、右手には雛鳥の首を下げて持ち、右足を縁側から踏みはづして大きく極る。(四月五日見物)